

報告「リーグ・テーブルを読む」

福田誠治（都留文科大学）

1988年と1997年にイギリスで学ぶ機会を得た。研究テーマは旧ソビエト連邦の教育であり、バーミンガム大学ロシア・東欧研究所に籍を置いた。新聞を読み、あちこちみて回るうちに、地域で生活しながらイギリスの社会を定点観測することもごく自然に研究テーマとなった。1988年は国家カリキュラムの導入をめぐる、そして今回滞在した1997年2－3月は、リーグテーブルの公開と総選挙をめぐる教育に関する論議はつきなかつた。本報告はイギリス教育の専門家からすると、危なっかしい報告でとても研究といえるものではないであろうが、素人なりに大衆の受けとめ方に近いのかもしれないと思い、報告させていただいた。

まず、1988年改革は予定通りに進行しているが、国家カリキュラムとの調整に要する教師への負担が増え、彼らの不満はくすぶり続けているようだ。ところが、教育基準監督所へと改組された教育視学官からは、一貫して教師への攻撃がなされている。とりわけ今回の報告書では、校長に対する批判が初めて登場し、逆に全国の優良校が表彰された。学校の実情によって、国家カリキュラムの基準を緩和して実施している学校が数多くあるようだが、このようなことが可能であるというあたりは日本と異なって興味深い。しかし、教育基準監督所は、国家基準の徹底を図るために、質の悪い教育は教師のせいである、それも校長が責任をとるべき問題であると非難したのである。不適格な校長は、初等学校の7分の1、中等学校の10分の1、合計3千人に上ると報告された。このようなことから、校長の能力証明を出すや否やが政治的に議論されているような状況である。

学校のカリキュラムは、2年、4年、3年、2年の4段階に別れており、生徒は各段階の終了時点で全国的に統一された試験を受けることになっている。将来は、入学時点でもテストを課すという案まで出されるくらいに、公立学校に対する規制が進んでいる。すでに中等教育終了時点のGCSE試験の結果は公表されてきたが、今回、第2段階にあたる初等教育終了時点の全国統一試験の結果を学校ごとに（したがって教育当局ごとにも）数量化して公表することになった。その意図は、結果に対して教師に責任をとらせようということだけでなく、結果をみて親に学校を選択させ、学校教育に競争原理を持ち込もうということである。

もちろん、このことであらゆる学校は序列・階層化されていくことになる。このことは、総合制中等学校にみられるような平等な学校制度を破壊することになり、かつての教育政策の否定を意味する。

やっかいなことは、教育政策に関して、保守党対労働党という図式で対立関係を描けないことである。トニー・ブレアは、ニュー・レイバーと自らを呼びながら労働党の政策を大きく変更したが、総合制中等学校内部を学力別クラスに編成するとか、子どもたちの異なった能力を強調して平等概念を変更することを提起し、学力差のある生徒たちを対象にした混合能力指導は理想論だと退けた。毎日宿題を出すことを義務付けるなど、能力競争を隅々まで徹底する教育政策を実行しつつある。

要は「イギリス病」をどう解釈するかに似ているのだが、労働党までもが「有能な人々の間にある福祉依存という社会悪」の除去を訴え、結局は貧困の原因は社会・経済の問題ではなく本人の意欲、努力なのだとする解釈にイギリス社会は傾いている。

以上のような報告のあと、会場から質問があった。労働党の教育政策は親の要求に応えたのだということの確認を求められたのだが、この点はそう簡単ではないと思われる。実力を付けさせたいという親の要求を否定はできないが、何を実力とするか、何を能力とするかは、議論のあるところではないか。(なお今回の報告は、加筆修正して『都留文科大学紀要』第48集(1998年3月)に収録してあります。)